賀茂縣主だより

発行所
〒603-8047
京都市北区
上賀茂本山339
賀茂別雷神社内
財団法人
賀茂縣主
同族会

◇◇◆歌仙堂◆◇◇

写真説明

山本家の邸内に残る歌仙堂。寛政三年に江戸から帰った賀茂季鷹は自邸の中の雲錦亭を根拠地として猛烈な作歌活動を展開した。雲錦亭の横に柿本人麿と山部赤人の木像を祀った建物が歌仙堂であり、「雲錦翁家集巻三」に

花の雲紅葉の錦万代に
立ちかさぬべき今日の團居(まどい)か

と見えるが、文化八年(一八一一)三月十八日に完成した歌仙堂に、六十数人の門人を育てながら歌会を催した時に詠んだ歌である。

新年のご挨拶

理事長　西池成晃

新年おめでとうございます。

皆様にはご家族お揃いでよき年をお迎えになられたことと拝察申しあげます。

昨年は神の怒りをも感じられる天災が多発しました。吾人の深い反省を求められているように思います。

今年こそは天災なき平和な年でありますことを神山の大神に祈るばかりです。

同族会活動の昨年を振返りますと公式ホームページの開設に始まり平成系図の編纂頒布、重文賀茂神主惣系図のCD版頒布、京都国立博物館への重文系図の出展、そのほか規程の改正による女子会員の誕生等であります。

また、地元の「賀茂文化研究会」のシンポジウムなどには主催団体の一つになるなど結びつきを強めています。斯様な活動を通して同族の結束が強まる方向へわずかながら歩を進め得たように感じています。

これらの経過を踏まえ平成十七年は次のような項目を念頭において活動を致します。

一、基本方針

①会員の結束強化による同族会の能力向上
②賀茂社や地元団体との関係緊密化
③賀茂氏の文化や文化財の顕在化と伝承

二、具体的活動事項

①賀茂氏文化の勉強会の拡充(歴史勉強会)
②地元文化活動への積極的参加による賀茂氏文化の顕在化
③賀茂地域の文化的評価向上への貢献
④国学者・歌人賀茂季鷹翁事績の顕彰と保存への積極的協力
⑤賀茂社への新しい奉仕の創始
⑥IT活用による全員参加型同族会へのさらなる前進
⑦内部規則規程類の見直し

このなかでとくに碩学季鷹翁の事績顕彰は同族の文化的評価と賀茂地域の史跡的評価とを高めるものと考えます。

また賀茂社への新しい奉仕ついては同族の誰でもが共同して行えるご奉仕を考えています。その節には皆様のご支援ご協力を賜りたくよろしくお願い申しあげます。

皆様のご多幸を切にお祈り申しあげます。

競馬階下勤役次第（五冊之内）
享保四年（一七一九）の書。階下は賀茂競馬諸役の一つ。

賀茂社競馬装束図
乗尻装束の寸法・色が図と共に記された図版。清茂が保蔵していたもので、現在の乗尻装束を考証する際非常に重要な史料である。現在の衣装との差異はほとんど無いが、以前からも指摘されていた点として、現在の奴袴の色は褊襠と同じ赤地と黒地だが、本来は萌葱色の地であることが史料中にも明記されている。

賀茂社記
奈良社祢宜有久書。寛永十三年（一六三六）。賀茂競馬に関しては、戦国・江戸前中期の史料はほとんど見つかっておらず、この時期の史料は当時の儀式次第を知る上で重要である。江戸初期の儀式次第については、すでに長塚（二〇〇二）が現代語訳を発表している。

（以上、馬の博物館所蔵）

賀茂社家総系図
原本は鎌倉末期。在実が起点になっており、江戸時代まで書き足しがある。成平（蹴鞠の名手）など有名人物に対しては赤字で注が記されている。縦系図形式で書かれており、長幼の順が記入されている点が注目される。

上賀茂社競馬方等算用状
原本永正四・九（一五〇七・十二）における、競馬関係の出納記録。当時どの程度の出費があったのかを知る上で興味深い史料。

●蹴鞠関係史料

難波家蹴鞠書　賀茂流鞠記
天正七年（一五七九）六月松下元久の書。

難波家蹴鞠書　賀茂流蹴鞠記（内題　第一　蹴鞠口伝抄）
寛永十一年（一六三四）松下教久の書。蹴鞠の所作をまとめたもので、体系的に記述されているようであった。内容がその場で読み取れなかったのが残念であるが、今後現在の作法と比較して、賀茂流の蹴鞠がどのようなものであったかを明らかにしたいと考えている。

（以上、東京大学史料編纂所所蔵）

ここに紹介しただけでも、興味深い事柄が多数記述されており、今後丁寧に調べていく必要がある。特に、戦国・江戸前期付近の史料は非常に少ないため、これらの史料の分析が進むことで、儀式次第の変遷過程がより明らかになることが期待できる。また、古式競馬に関する好著を書いておられる馬の博物館学芸員長塚孝氏にもお目にかかることができ、お話を伺うことができたのも大きな収穫であった。

今回の調査は、東京大学史料編纂所図書室の方々、馬の博物館学芸員長塚孝氏、また同行頂いた京都文化博物館学芸員土橋誠氏に多大な協力を頂いた。

◎参考文献

源城政好、一九九二…賀茂競馬会神事関係資料（一）競馬記。賀茂文化研究、一、七三―九一。
源城政好、一九九三…賀茂競馬会神事関係資料（二）競馬記（一）。賀茂文化研究、二、八一―九六。
源城政好、一九九四…賀茂競馬会神事関係資料（三）競馬記（二）。賀茂文化研究、三、一〇五―一二〇。
長塚　孝、二〇〇二…日本の古式競馬―一三〇〇年の歴史を辿る―、神奈川新聞社、一〇九pp。

第五回関東支部総会開催の報告

関東支部長　岡本清孝

去る平成十六年九月十二日（日曜日）午後一時より午後五時まで、東京国際フォーラム（東京都千代田区丸の内）G四〇一号室において標記総会が開催されました。参加人員は十四名で、委任状を含めると五十八名となり、これは会員の半数以上となるため、総会は成立致します。尚、西池会長及び北大路副会長は京都において会合があり、それに出席されるため、残念ながら東京へはお越し願えませんでした。

総会を始めるにあたり議長の選出があり、堀内保丸支部長が選任されました。

議事に入る前に去る平成十六年三月二十三日、藤木芳清役員のご逝去を悼み一分間の黙祷を捧げた後、引き続き議題に入り、最初は平成十五年度の活動報告から始まり、平成十六年一月と七月に役員会を開催したこと、三月二十四日、貞源寺にて執り行われた故藤木芳清氏の葬儀に、堀内支部長が代表で参列された事などが報告されました。続いて平成十五年度会計報告は西池成俊役員より説明があり、会計監査は藤木千夏子氏より適正な会計処理がなされているとの報告がありました。

第三の議題は二年毎に行われる役員改選でありますが、堀内保丸氏に引き続き支部長続投を全役員がお願いしたものの、堀内氏自身の健康問題が重要であることから、代替支部長を堀内氏より岡本清孝を推挙され、全員がこれを了承致しました。新組織は後日に発表することになり、最後に平成十六年度事業計画が発表され、無事総会は終了いたしました。引き続き総会記念講演を、堀内保丸氏より「終戦前後の賀茂」と題して、神の啓示或いは天啓を受けた我々の祖先を敬う心を失いがちであること、敗戦と同時に荒廃に向かう上賀茂神社の姿を目の当たりにしたこと、戦争に負けたことばかり嘆くのではなく、何故負けたのかを考える必要に目覚めた事など、約九十分間にわたり熱のこもったご講話を頂きました。

雅楽を始めてみて

西賀茂　掘内邦保

私は現在、賀茂別雷神社で伶人として年間約二十日余り大神様に近いところでご奉仕させていただいております。

雅楽を始めたきっかけをよく聞かれますが、二十五年位前に当時の賀茂別雷神社の禰宜である多賀先生から、社家は、なんかの形で神社に御奉仕すべき事を聞き、小学校からずっとトランペットを吹いていたものですから、同じ音楽というような気楽な気持ちでお受け致しました。

最初に「笙、龍笛、篳篥」のどれを選ぶかという時には、姿形も独特で、音色が何とも言えない美しい「笙」を選んだ訳ですが、これほど奥の深い楽器、音楽とは当時は想像すらしませんでした。難しいことはございませんが、易しいことは決してありませんでした。

多賀先生に当時の賀茂別雷神社で伶人をされていた横井先生を紹介していただきました。横井先生は現在、私が所属しております平安雅楽会の理事でご活躍された方で、「笙」以外にも、他管の事、近年の雅楽の歴史、人間関係等もよく教えていただきました。日本の和の習い事は、特に後記の事が重要であることは、未だに痛感致します。

この記をお読みの方はご存じのとおり、笙という楽器は演奏前後に火鉢で焙じなければなりません。寒いときは火鉢片手でいいのですが、梅雨時の湿気が多いときでも、大汗をかきながら火鉢で笙を焙じます。龍笛や篳篥には無い苦労です。又、吹いても吸っても鳴る楽器ですので、息が荒れておりますと演奏できません。奏楽中は常に無の境地になって、龍笛、篳篥の音に耳を澄ましております。

始めた頃は雅楽人口も少なく、テレビで雅楽をする少女の番組が放映された頃から急に雅楽人口は増えました。雅楽人口が増えますと、楽器の需要が高まり、安価になり、各所で発表会等が催され、互いに勉強になりましたし、調律にしても、最初は調子笛や音叉でしたが、メーカーからデジタル式の調律器が発売されたり、電気製の笙の保温器が考案されたりと、便利な道具もでてきました。

賀茂別雷神社の大祭での伶人の奏楽演目は開扉は龍笛だけの「乱声（らんじょう）」、献撰からは三管で「壱越調（いちこつちょう）」の「賀殿急（かでんきゅう）」、撤撰は「胡飲酒破（こんじゅは）」、閉扉は「武徳楽（ぶとく）」となっております。

京都には勅祭神社がいくつかあり、その大部分を伶人奉仕経験させていただいておりますが、賀茂別雷神社だけは、奏楽演目以外に作法やその他、他社と違う部分が多く見受けられることなど、伶人でないと判らない事も多く経験させていただきました。

現在は平安雅楽会という京都方で一番古い雅楽会に属しております。京都の雅楽会のほとんどは平安雅楽会からの分かれになっております。賀茂別雷神社、賀茂御祖神社、石清水神社、御所葵祭、その他含めて年間に多い年で約五十日以上を奏楽しています。

現在は雅楽を始めるのに年齢性別の境は無くなっておりますので、興味のあられる方はお勧め致します。永く続けられるものです。

今回はとりとめ無い事を書きましたが、ご縁がありましたら、次回はもう少し勉強になるような事を書きたいと思います。

同族会シンボルマーク決定

平成十一年六月十九日開催の理事会に於いて募集していた広報紙名（応募作品十六点）を出席者全員による記名投票の結果「賀茂縣主だより」（藤木襄治氏の作品）と決定し、平成十二年一月一日発行の第五号より題字として使用しておりますのはご高承の通りでありますが、同時にシンボルマーク（応募作品七点）についても記名投票の結果丸い縁の中に八咫烏と葵の葉を配した図柄が採用され（岡本清信氏の作品）更に専門家の意見を得て使用する事にして居りましたが此程漸く決定する事になり、第十五号から使用する事にしました。

岡山訪問記

（平成十六年十月十一日訪問）

上賀茂　市　忠　顕

一、岡山市竹原（旧賀茂社領備前国竹原庄）の竹原神社

貴布祢神社、八幡神社、片岡神社の三宮を合わせて、竹原神社としたと記されていた。貴布祢神社と片岡神社は上賀茂神社の摂社の名であり、賀茂社領であったために祀られたと考えられる。

二、岡山県邑久郡邑久町山田庄（旧賀茂社領備前山田庄）の貴布祢神社（貴布祢山上に鎮座）

京都の貴布祢神社は中世は賀茂別雷神社の摂社であったから、この貴布祢社も賀茂社領になったことにより、京都から勧進されたものと考えられる。山田庄の地名がそのまま残っている。旧尾張保の内。尾張の地名も残っている。

三、岡山市加茂（水攻めで有名な高松城の近く）の加茂大明神

以前尼さんが住み込みでこの神社の守をされていたが、その方は亡くなられ、現在の神主さんは黒住さんと言うが、黒住教とは関係がないそうだ。拝殿には木魚と鉦が置かれていた。境内には釣り鐘があり、加茂大明神の文字が鋳抜かれていた。これらは神仏混淆の証と考えられる。御神像を見せていただいたが、平安時代風の衣装の男神像で色彩が鮮やかであった。お祀りがすんだ後のようで、三人の役員らしき方がおられたので、御神祭のお名前を尋ねたが、どなたもご存じなかった。

四、岡山市三手の上加茂神社（上記の加茂大明神より少し北に行ったところにある。）

御神祭…神日本磐余彦火火出見命（カンヒモトイワヨヒコヒヒデミノミコト）この神名およびフリガナは地元の人の示してくださった紙に書かれていたものをそのまま写した。十月十一日の午後に訪れたが、氏子の人々が拝殿いっぱいに集まって、お祀りが斎行されていた。正面の石の鳥居の近くには、上加茂神社と書かれた、大きな幟が一対立てられていた。神主さんは女性の方であった。祝詞の調子が変わっていた。家内にいわせると少しお経のよう（な調子）だったとのことであった。この神社にも釣り鐘があり、上加茂神社と鋳抜かれていた。

この後、大きさで日本第4位と言われる造山古墳およびその倍塚のあたりを散策した。自由に立ち入りが許されている古墳では日本一の規模を誇る。作山古墳も訪ねたかったが、時間の関係で今回は断念した。吉備津神社や吉備津彦神社の訪問も今回はできなかった。

賀茂競馬・蹴鞠関係史料調査（二〇〇四年十一月・東京）の報告

岩倉山本宗尚

伝統行事を遺し伝えていく上で、過去どのような儀式・作法で行われていたかを整理しておくことは重要である。私は大学入学以来、競馬会神事と蹴鞠に奉仕させていただいていることもあって、これらの行事に関連した文献の調査を始めた。これらは歴史的に（また現在においても）著名であるにもかかわらず、意外と印刷公表されているものが少ないように思う。競馬会神事も蹴鞠も、賀茂の社家が大きく関わったものであり、社家の遺した史料が手がかりになることは言うまでもない。十一月に二度東京に赴き、これら二つの行事に関するいくつかの史料を閲覧することができたので、ここに報告したい。

●賀茂競馬関係史料

競馬記　賀茂保可編

承応三年（一六五四）賀茂競馬に関する記述を集約したもの。源城（一九九二、一九九三、一九九四）翻刻の競馬記とは異なるようだが、内容をつきあわせて確認する必要がある。中には乗尻の名前も書かれている。

足汰競馬会雑記

幕末における足汰式の際の乗尻名と番が記されている。中に山本家の祖先に出てくる名前を見つけることもでき、先祖が乗尻として実際に乗っていたのだ、ということを実感することができた史料であった。

賀茂競馬記（五冊之内）

寛政三年（一七九一）までの記述がある。

賀茂足汰乗尻之次第（五冊之内）

五月一日に行われる足汰式の儀式次第を記述したもの。京都府立総合資料館所蔵「五月朔日足汰覚悟記」とほぼ内容は同じと思われる。最後に「御迎馬略次第」という儀式の次第が載っていたが詳細は不明である。また、荘園名に着目すると、十三番以降は現在とは異なっている（現在は二十番まで全て荘園の名前が付いているのに対し、摂社の祢宜・祝の名前が付く）。これは江戸時代の史料に共通していることであるが、どの時点で変更となったのかは他の史料・記録物により推定しなければならない。

初乗勤之次第（五冊以内）

明和四年（一七六八）の書。賀茂競馬に初めて奉仕する者を初乗と言う。現在は初乗がしなければならない仕事というのはほとんどないが、当時初乗の仕事はかなり多かったようで、別に仕事内容をまとめたものと思われる。例として、菖蒲の根合わせの儀の前には、神宮寺の鐘を撞くといったものがある。

平成十六年十月二十四日 賀茂縣主同族会祖先祭

（敬称略）

藤木　文雄
藤木　渉
岡本　修
藤木　経
西池　隆造
中大路三栄子
井関　美幸
藤木　清子
梅辻　篤子
浦野　賀子
市　真由美
山本　武久
西池　珠子
西池　華子
藤木　碌也
梅辻　諄
市　忠顕

堀川　潤
岡本　清信
東辻　正子
東辻　保和
藤木　茂
岡本　正保
西池　恒氏
岡本　静江
岡本　房江
山本　愛子
山本　節子
三ツ橋　知子
岡本　和子
山本　真千子
藤木　十紫子
北大路みよ子
藤木　伸子
藤木　秀昭

錦部　俊和
錦部　美清
藤木　澄子
江島　直子
西池　鈴子
松田　一雄
藤木　千夏子
堀内　保丸
北大路　元顕
西池　成晃
須磨　千顕
林　重明
林　静子
竹川　稔子
松下　澄子
岡本　吉子
高田　穣
藤木　和子

西池　隆造
岡本　修
藤木　経
中大路平顕
西池　成俊
岡本　安正
浦野　邦夫
戸田　保輝
市　聡顕
堀内　義晃
岡本　清紀
藤木　光男
山本　浩久
藤木　保誠

第十一回平成十六年四月十一日〝賀茂曲水宴〟に童子奉仕

◎山本　信吾君（山本裕司　氏次男）
◎山本　晃大君（山本寛人　氏長男）
◎藤木　孝顯君（藤木彰人　氏長男）
◎山本　卓弥君（山本　直　氏長男）

第十二回が四月十日に催行されます。童子に参加出来るご子弟（小学校生男子）は役員迄ご連絡下さい。

葵歌壇

冷泉家玉緒会所属

上賀茂　北大路　和　子

初日
海と空あかねに染めてしののめの
朝日かかよふ春のあけほの

鹿
山深く時丙に迷ふさ牡鹿の
かいよとそ啼く恋を侘ひしむ

註 かいよ＝鹿の鳴声

初氷
冴えまさり比叡おろしの風寒み
初うすら氷に閉つき池の面

霧
雁わたる朝の空を見渡せは
霧にこもれる八重の山やま

※左は平成十六年九月七日平成歌会の入選歌

立秋
桐一葉散り来る音に立つ秋の
わひしさ憶ゆかはたれの頃

葵俳壇

上賀茂　藤　木　十紫子

祖先人思って暮るゝ今日の秋　（祖先祭）
初歩き夫と目指しゝ久我の宮
大空に銀粉散らし百合鴎

上賀茂　北大路　みよ子

初春や舞樂に見入る賀茂社
初春の社に流る水清き
配達の重き音せる初便り
初詣順位厳しき夫なりき

当時を体験した人は感懐を新たにし、京都をそして終戦直後を知らない世代が多く占める関東支部の会員諸氏にとっては、興味と感激を覚えるひと時を過ごしました。

次回には須磨教授のご講話が頂ける機会がにな適うよう切望しながら散会いたしました。

◎新役員の紹介

顧問　堀内保丸
顧問　藤木顕通
支部長　岡本清孝
副支部長　西池伸弥
総務理事　岡本英利
会計理事　西池成俊
理事　西池氏裕
理事　岡本光正
監事　藤木千夏子

歴史勉強会だより

上賀茂　梅辻　諄

去る十月二十二日、賀茂文化研究会とトヨタ財団が主催する市民研究交流発表会が京都ガーデンパレスで開催された。参加者約百名。これは同財団から助成金を受けている各地の団体の年に一度の活動報告会である。

この会では「石見銀山」、群馬の「養蚕農家」、「能勢古街道の発掘」や静岡の「火見櫓」などの研究、国友藤兵衛設計による自転車と飛行機の模型や木曽に残る「お六櫛」の製作など多彩な内容の展示や講演が行なわれた。賀茂文化研究会は「賀茂季鷹と賀茂文化」と題して、季鷹の遺墨の写真展示を中心に、幕末の上賀茂に存在した文化人サロンを説明した。賀茂が生んだ偉大な歌人と周囲の文化人の交流を明らかにするため、文献類を探し、その写真を収集するのが我々の当面の目標である。

翌二十三日、この会は上賀茂神社へと会場を移し、一同参拝の後、勅使殿にて宮司挨拶、藤木保誠氏の神社説明に続き、藤木文雄氏による「賀茂県主と賀茂」について講演があった。境内の芝生では国友研究会による「藤兵衛の飛行機模型」と自転車が展示され、異様な姿で人々の注目を集めた。講演後、参加者は小グループに分れて上賀茂の町を散策した。案内と町並み説明にわが同族会の諸氏が大活躍をされた。

その日の午後から京都産業大学神山ホールにおいて「第二回上賀茂シンポジウム」(同族会も主催団体の一員)が開催された。そのテーマは「紅葉音頭」で山路興造氏の「盆踊としての紅葉音頭」の講演と紅葉音頭保存会による実演があった。保存会の方々は夏以降、度々の練習を重ねられ、素晴しい出来映えを舞台で披露された。

来たる一月三十日(日)十四時より京都産業大同窓会館にて文化財防災講演会(同族会も共催)が開催される。京大防災研の佐藤忠信教授の「来たるべき大地震に賀茂の人々はいかに備えるか」その他の講演がある。乞御来聴。

また、十月二十九日開催の「第三回上賀茂シンポジウム」(仮題　賀茂の自然)では文化庁文化部長　寺脇研氏京産大の野村、斉藤教授の講演を予定している。

平成17年役員会開催予定(於 神社)

(1)理事会

第39回	平成17年 2月20日(日)	13:30
第40回	平成17年 6月 5日(日)	13:30
第41回	平成17年10月16日(日)	13:30

(2)評議員会

第36回	平成17年 2月13日(日)	13:30
第37回	平成17年 6月12日(日)	13:30
第38回	平成17年10月 9日(日)	13:30

(3)合同事務局会議

49回	1月16日(日)	14:00
50回	2月 6日(日)	13:30
51回	5月22日(日)	13:30
52回	7月17日(日)	13:30
53回	9月11日(日)	13:30
54回	11月13日(日)	13:30
55回	12月11日(日)	13:30

(4)系図展観
7月31日(日)(雨天中止)

(5)祖先祭
10月30日(日)

※尚、神社の都合で変更もありますのでご承知下さい。

訃報

次の方々が御逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

大阪泉南郡	山本六郎氏	平成16・5・14卒
京都北区	岡本みよ子氏	平成16・6　卒
京都北区	堀内保逸氏	平成16・12・11卒
京都北区	藤木正直氏	平成16・12・12卒
京都北区	中大路顯信氏	平成16・12・31卒

以上平成16年12月末までに連絡を頂いた方々です。

編集後記

清水寺貫主の書かれた昨年の世相を表わす漢字が〝災〟であった。台風あり地震ありで被災地の方々を始め会員の皆さん方には如何でした。今年は貫主の云はれるように皆んなが力を合せ〝和〟の気持で一年を乗り切りたいと思います。尚紙の都合で会務報告は割愛致します。悪しからず。